

(対象事業：地域連携強化事業・地域文化資源整備活用事業・ミュージアム支援地域人材育成事業・国際交流拠点形成事業)

事業名： 大津百町大写真展－まちを記録すること－

事業者名：大津市歴史博物館

住所：滋賀県大津市御陵町2番2号

TEL： 077-521-2100

FAX： 077-521-2666

HPアドレス：<http://www.rekihaku.otsu.shiga.jp/>

連携事業者名：大津の町家を考える会・シネファンク・龍谷大学社会学部・成安造形大学・大津市都市再生室
他

会場：旧大津公会堂 他

事業期間：平成22年5月15日～平成22年12月31日



1. 館の使命と本事業の関係

本事業は、地域博物館が持つ資料や研究成果を、地域と共同で事業を進めることによって活用することを目的としている。今回は「まちづくり（中心市街地活性化）」という、地域の現代的な課題に対して、博物館と地域の活動団体とが、こういったアプローチが出来るのかを念頭に事業を行なった。

2. 企画内容

① 事業目的

江戸時代から賑わいを見せる大津百町（大津市中心市街地）は、近年、都市構造や交通体系の変化によって、まちの賑わいが失われていることが問題となっている。

本事業では、博物館が持つ古写真を地域の移り変わりを示す資料として提示するとともに、地域のまちづくりに関わる諸団体と、写真を手掛かりに、町の有形・無形の歴史を共に蓄積・公開することによって、博物館が「まちづくり」という現代的な課題において、どの様な役割を果たせるのかを検証することを目的とした。

昔の大津の風景・生活に触れる→今の大津を発見・記録し、まちづくりに生かす

② 事業概要

写真という共通テーマに基づいて、博物館と諸団体がそれぞれに独自の写真展を企画し、大津百町内の5か所で展示を行った。内容は、古写真を手掛かりに、当時の記憶や思い出を観覧者と共有する写真展（2会場）と、現在の町の写真を展示することで、現在の町を知ることや写真として記録することの重要性を喚起する写真展（3会場）からなり、これらの写真を見ることで地域の持つ歴史と現状をイメージするとともに、記録することの重要性を喚起する構成とした。

期間中は、会場以外の商店や施設と連携したミニスタンプラリー（通期）や見学会・講座等を行い、各会場間のまち歩きを含めて展示を楽しめるよう心掛けた。

3. 事業実績

(1) 事業の主な内容及び日程

☆展覧会事業【10月30日～11月23日】

◆大津百町思い出写真館【企画：大津市歴史博物館】

市内在住の写真家・谷本勇氏が撮影した昭和30～40年代の大津百町の写真から、街並みや人々の暮らしぶりを振り返る150点を展示。観覧者は写真に関する思い出を周囲に貼り付け、当時の様子を写真と文字で共有する。[会場：旧大津公会堂]



◆オールドオーツ『物語の誕生』2010【企画：シネファンク】

各家庭のアルバムに眠るスナップ写真を元にインタビュアーが聞き書きして物語に編集。写真と文字で1枚のパネルを制作、約100点を展示する。[会場：JR大津駅]

◆20年後に残したい大津☆携帯写真展【企画：おおつのええもん・ええとこ携帯写真展実行委員会】

一般公募の写真展。「20年後の人々に見せたい大津百町」というテーマで、今の大津百町の様子を携帯写真で募集し、期間中に展示。20年後に再度展示する。[会場：大津百町館]

◆大津百町2010ーまちなかの記録ー【企画：成安造形大学 写真メディア研究室】

成安造形大学の学生たちが、現在の大津のまちなかの様子を記録することをテーマに、それぞれの問題意識・表現で作品制作を行う写真展。[会場：サテライト八百与]

◆大津百宝プロジェクト展【企画：大津百宝プロジェクト(有志)】

現在の大津百町を路上観察的に歩いて見つけたスポット約30か所を紹介。まち歩きの方法やポイントを紹介する。[会場：天孫神社本殿回廊]

☆期間中のイベント等

◆大津百町ミニスタンプラリー【期間中随時】

展示会場5か所と市内の商店施設10か所をめぐるスタンプラリー。完走者には記念品を呈呈。

◆大津百町にお庭を探そう！ワークショップ【10月31日(日)】

大津百町内に潜む「緑＝お庭」を参加者がレンズ付フィルムで撮影し、披露するワークショップ。造園植治・小川勝章氏のお庭に関する講演会と共に開催。

◆大津百宝まち歩きツアー【11月13日(土)】

大津百宝プロジェクト展関連講座。市内のまち歩き。

◆思い出8mm映像工房【11月13日(土)・14日(日)】

家庭に眠る8mmフィルムを簡易テレシネする催し。

◆大津百町を見おろそう!! (見学会)【11月17日(水)】

過去と現在のビュースポットから、大津百町を見おろして風景の移り変わりを知る。

◆8mmフィルムでタイムトリップ!!上映会【11月20日(土)】

昭和30～40年代に撮影された個人の8mmフィルムを鑑賞する上映会。

(2) 参加者の数

入館者数 延べ 9,861 人

内訳：「大津百町思い出写真館」3,151人・「オールドオーツ『物語の誕生』2010」2,956人

「20年後に残したい大津☆携帯写真展」1,129人・「大津百町2010ーまちなかの記録ー」1,548人

「大津百宝プロジェクト展」1,077人

スタンプラリー記念品交換者 1,228人

(3) 事業により作成した印刷物等

- ・ 大津百町大写真展公式ガイドブック (A5版 36ページ・10,000冊)
- ・ 写真事前募集チラシ (A4版・10,000枚)
- ・ 告知チラシ (A4版 6ページ・35,000枚)
- ・ 告知ポスター (B3版・4,000枚)

(4) 実施事業に関する新聞記事等

○新聞記事

大津市の今昔写真で見る「大津百町大写真展」が30日から大津市の中心市街地一帯で開かれる。大津の街を被写体にした昭和の懐かしい白黒写真から現代の携帯電話の写真まで多彩に展示。各会場を巡ると街の歴史と今に到る絶好の機会になりそうだ。

30日から 市内5会場で展示

大津市の今昔写真で見る「大津百町大写真展」が30日から大津市の中心市街地一帯で開かれる。大津の街を被写体にした昭和の懐かしい白黒写真から現代の携帯電話の写真まで多彩に展示。各会場を巡ると街の歴史と今に到る絶好の機会になりそうだ。

市歴史博物館、市ファンク、成安造形大、市などが主催。「大津百町」という中心市街地の街の思い出を集めた写真展。大津市の歴史と今に到る絶好の機会になりそうだ。

滋賀県庁から園城寺方向を望む風景。ビルはなく、雪化粧した日本家屋が並ぶ (1957年) 同

めるとともに今の街では市民が、携帯電話でも記録しようと市内5会場で初めて開く。旧大津公会堂 (浜大津一丁目) では市内で写真展を営む谷本勇さん (86) が昭和30、40年代に撮影した写真約120点を展示する。1964年の東京オリンピックで市内を聖火リレーのランナーが通る様子や、立ち並ぶ以前の県庁からの眺め、にぎわう京阪大津駅前のほか、谷本さん一家の暮らしなど当時の生活も写している。JR大津駅で隣でも、市民から集めた昭和に撮影された写真とそれにまつわる物語を紹介する。

サテライト八百与 (養父町商店街内) では成安造形大の学生が大津の街を写した写真を展示するほか、大津百町館 (中央一丁目)

平成22年10月28日 京都新聞

同様の新聞記事 読売新聞 (滋賀版) 平成22年10月26日 朝刊
毎日新聞 (滋賀版) 平成22年10月27日 朝刊
京都新聞 (滋賀版) 平成22年10月28日 朝刊
中日新聞 (滋賀版) 平成22年10月31日 朝刊
京都新聞 (滋賀版) 平成22年10月31日 朝刊
産経新聞 (滋賀版) 平成22年11月16日 朝刊

○テレビ、関連誌等

NHK大津放送局 「おうみ610 (ニュース) 内「おうみ探検隊」コーナー」

平成22年11月17日 18時10分～19時 (8分程度放映)

京阪電鉄石坂線車両のデコレーション

開催期間中

4. 事業の成果及び今後の課題

【成果】

① 地域の活動団体との連携

博物館単独の企画ではなく、地域の諸団体と共に企画することによって、町の歴史を振り返るだけでなく、現在の町の状況を間接的ではあるものの、浮かび上がらせることが出来た。

② 地域での広がり

本事業を通して、主催団体だけでなく、実施場所である地元の自治会や商店街等との連携を深めることができた。商店街では、写真展開催に合わせて、独自に写真展が開催されるなど、本事業をきっかけとした地域の取り組みが見られた。

③ 写真資料活用の可能性

今回は、古写真を一方的に展示するだけでなく、来館者の思い出や記憶を積極的に拾い上げた結果、記憶を共有する楽しみを認識していただけた。また、現在の地域の姿を記録する写真展についても、撮影された場所に関する問い合わせが多く寄せられるなど、現在の地域に関する関心や記録することの重要性を喚起するものになった。

④ 展示会場の工夫

空き店舗や神社の回廊等、町なかで展示会場となることで、新鮮な驚きを与えることが出来た。また、会場の分散とそれらをつなぐスタンプラリー等の開催によって、期間中にはエリア内に多くの観覧者が歩く姿が見られ、地元でも話題となった。

【課題】

① 事業の継続性

事業に対して多くの関心を集めたことから、期間中や事後においても、本事業の継続を望む声が多く聞かれた。また、古写真に対するさらなる記憶の収集や、現在の町の記録を蓄積していくためにも、単年度で終わるのではなく、一定期間の事業継続が必要であると感じている。

② 町あるきに対する工夫

スタンプラリーの開催により会場間の回遊性が高まったものの、ラリー自体が目的となってしまう観覧者も見受けられた。実施方法についてもう少し工夫が必要であった。

③ 成果物の作成

展示作品の冊子化を望む声が多く聞かれた。今後も継続的に事業を進めるなかで、参加者の記憶を取り入れた形での冊子化を目指したい。